

## 泉涌寺蔵「諸天像」をめぐる考察 ―諸天の構成と配置に着目して―

高志 緑（大阪大学大学院）

真言宗泉涌寺派の本山として知られる京都・泉涌寺は、12年の入宋を終えて帰国した俊苧律師（1166～1227）により開山され、創建当初は渡来僧や入宋僧らによってもたらされた大陸の仏教文化を伝える中心地のひとつであった。南北朝・戦国時代の動乱期により失われたものも多いが、現在行われている泉涌寺の修正会では宋音の『金光明懺法』が用いられており、俊苧の訪れた南宋寺院で行われていた金光明懺法を現代まで伝える法会として注目されている。

泉涌寺には、江戸時代の作とされる「諸天像」二十二幅（以下泉涌寺本）が所蔵され、現在も金光明懺法を勤修する際に堂内に掛け並べられる。描かれる天部は、法会の場に勧請される「金光明経」由来の諸天に「稻荷明神」、「泉涌寺伽藍神（五神）」の二幅が加わったものである。法会で招請される天部の構成や順序については、宋代を通して天台僧による議論があり、おおむね二十尊ほどの天部が一つのグループとして祀られていたことが知られる。本発表では、泉涌寺本をその図像と構成・配置の両面から検討し、図像面は古渡りの宋元仏画を踏襲しながらも、「稻荷明神」や「泉涌寺伽藍神（五神）」が含まれる点については黄檗僧により伝えられた諸天像を受容し、さらに現行の配置は「金光明懺法補助儀」を撰した北宋の慈雲遵式への回帰が想定されるという重層的な成り立ちをしている可能性を指摘する。

泉涌寺本に類する諸天の構成は、隠元とともに来朝した中国僧独湛の創建である黄檗寺院、静岡・宝林寺の「二十四菩薩立像」（康祐作、寛文八年（1668））、弟子の石窓の創建である静岡・大雄寺の「天王神像」（独湛の弟子紫玉道晶画賛）四幅にみられる。すなわち、「金光明経」の諸天に加え、「関羽帝君」、「天照大神（三神）」という伽藍神的性格の神が祀られているのである。この他にも宝林寺には、他の黄檗寺院には見られない造像が指摘できる。ここに独湛固有の信仰が反映されている可能性があり、思想背景として明末四大師の一人雲棲株宏（1535～1615）への傾倒が考えられる。

泉涌寺は、応仁の乱による焼失ののち、寛文年間に至ってようやく復興を遂げている。正徳二年（1712）をそれほど降らない時期に記されたと見られる『泉涌寺殿堂并什物色目』には、「台命」（徳川将軍家か）の喜捨により新たに十八天を写したとあり、これが現在の「諸天像」二十二幅を示している可能性は高いと思われる。一方独湛は、寛文四年（1664）に宝林寺を創建し住持を務めたのち、1681年から1692年の間黄檗宗本山萬福寺の第四代住職を務め、引退後1706年に没するまで萬福寺塔頭の獅子林院で過ごすなど、後半生を京都で過ごしている。泉涌寺本の図像の祖本については慎重な検討が必要であるが、諸天の構成については宝林寺の「二十四菩薩立像」や大雄寺の「天王神像」に関する情報が泉涌寺に伝わる機会があったとみてよいのではないだろうか。